『トム・ソーヤー』のユーモア

金谷良夫

マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒険』(以下『トム・ソーヤー』と略記)に見るユーモアは読者の記憶のなかに顕著である。トウェインはユーモリスト(ユーモア作家)として、終生ユーモアを描いた。この作品も例外ではないし、そこに見出せるユーモアは明暗併せ持ち、そのユーモアの根底には、必ず人間性が読み取れる。ウィリアム・ディーン・ハウルズは、トウェインはセルバンテス、スウィフトなどの仲間に入るが、「人間性においては、誰も彼に匹敵する人はいなかった」と述べている。(1)

『トム・ソーヤー』は少年の物語と見なされがちであり、明るい面が強調されるが、実際、やはり明暗併せもつ小説だ。なぜならトウェインが内面はシリアスな作家でもあったからである。つまり、トウェインを単なるユーモア作家と考えてはならなく、そこには彼のユーモアあるいは笑いの背後には深刻な問題が潜んでいる場合が多いし、そこに何らかの「教え」が盛り込まれているからである。

しかしながらトウェインは、彼が好むと好まざるとにかかわらず人を笑わすおもしろい作品を描くしかなかったと言えるし、またそう運命づけられていたと言ってもよい。彼は、1865年10月に兄オーリオン夫妻に宛てた手紙で示すように、彼の文壇へのデビュー作であるフロンティアの短編、「飛び蛙」がセンセーションを巻き起こしたのは、文学への「神のお召し」があったからである。トウェインがその手紙のなかで言うように、皮肉にも「神の創造した人間の笑いを引き起こすために書く」(2)ことに専念することがよいと考えたのである。

さて、トウェインはトムとベッキーのラブストリーを1868年に書き、それから1870年および1872年に書棚にしまい込み、例によってトウェインのいう「タンクの水が枯れ」てしまい、その後1875年の5月に再び書き始め、その年の7月5日までに『トム・ソーヤー』を書き上げている。(3) ウィリアム・ディーン・ハウルズは作品について、11月21日のトウェイン宛ての手紙で、「私は一週間前に『トム・ソーヤー』が途中で止められないので午前一時まで夜更かしし、最後まで読み終えて

しまった。…大成功をおさめるだろう。…冒険は魅力的だ。あの島に私がいられたらと思う」と絶賛し少年向けの小説であることを確認している。[(4)] 事実この作品は、『ハックルベリ・フィンの冒険』（以下『ハック・フィン』と略記）に次いでトウェインの第二番目の人気作である。そして、確かにこの作品は少年少女に適った物語であるにはあるが、作者の微妙なユーモアを完全に理解するためには子供では荷が重過ぎる。

1876年の8月28日付けの『タイムズ紙』は「『トム・ソーヤー』は天才のあるトウェイン特有の作品だ」と報じた。また、1876年12月21日の『ニューヘーヴン朝刊ジャーナル新報』は、「その［『トム・ソーヤー』の］作者の全作品と同様、それには珍しく風変わりなユーモアが溢れており、…新たな喜びを持って何度も読むことができる…最良の部分――ウイット、ユーモア、その天才がアメリカのあらゆる少年の頭上何マイルと舞い上がっている…『トム・ソーヤー』は少年時代の生活が忠実に蘇えるのを見て大きな喜びを感じる大人によって大いに楽しまれるだろう」と評価している。しかし、やはり『ハック・フィン』（1885）が出版されたときと同じように、トムは困難な道を歩むことになったのである。すなわち、1876年に、マサチューセッツ州コンコード公立図書館は、トムは嘘吐きで、罪深く、冒涜的だという理由からその本を図書館から締め出したのだ。デンヴァー公立図書館も同様にトムを拒絶し、またブルックリン公共図書館も子供の図書室からトムを除外した。『自伝II巻』によれば、トウェイン自身そうした非難に対して1905年に「私はトム・ソーヤーとハック・フィンを専ら大人のために書きましたし、私は少年少女の手元に及ぶのを見るといつも困ってしまいます…。もし子供の部門に削除されていないものがあれば、どうかその女性［トムとハックの本が子供の図書部にあることを知った良心的で熱心な若い女性］にハックとトムをその問題の部門から外していただくようお口添えくださいませ」[(5)] とユーモラスに書いている。『トム・ソーヤー』出版当時は時代性を鑑みれば、確かに一部の場面は、敬虔な宗教家にとっては笑える性格のものでなく、冒涜と読め、非難の対象として考えられたことは無理がないとしても、その後30年近く経っても『トム・ソーヤー』には問題があったし、現在でも引き続きその問題は解決されていない。一例として、それには『ハック・フィン』ほどではないにしても、人種問題といった社会問題が含まれるからである。

しかし、トウェインは、『トム・ソーヤー』においてユーモアに発する笑いを描出している。『マーク・トウェインのノートブックとジャーナル 第3巻』（カリフォルニア大学出版）を見ると、トウェインは彼のユーモアの特徴である不敬（イレレバンス）（敬意を払わない見方）に関して次のように記している。

> われわれの新聞には一つ独特なものがある――それはアメリカ的であり――それは他のどこにも存在しない――それらの不敬だ。新聞がそれをなくすことも、それを変えることも全くないように。それは何に対して不敬なのか。ほとんど全てだ。だが、〈なぜなら〉それが一つの目的に適ったものにすっかり笑いを浴びせれば、それは一千もの冷酷で忌まわしい見せかけと迷信を滅亡させるし、それで清算ができる。不敬は自由の擁護者であり、その唯一の確かな防御手段である。

これは、「専制君主と呼ばれる第7等級の〈民族〉一族」と「高貴と当てこすりとして呼ばれたくだらない連中」の存在するヨーロッパの新聞の敬意を払わない見方に欠ける精神を率直に書いたものだが、基本的にアメリカ人としてのトウェイン自身による敬意を払わない見方に関する考え方を示す。アメリカ人は伝統にとらわれる謹厳な国民ではなく、トウェインはその代表である。トウェインによれば、無理をせず伝統などに縛られず権威に対しても、ものごとを真剣に考え過ぎないことが大切だというのだ。トウェインの有力な批評家ヘンリー・ナッシ・スミスが述べるように、トウェインのユーモアは基本的に敬意を払わない見方[6]をあらわし、そこから生じる笑いが大きな役割を果たす。トウェインの最初の本『世間知らず外国へ行く（イノセンツアブロード）』における特色は不敬と言ってよい。だが、彼はユーモリストであり、彼のユーモアは率直で悪気がない。要するに、トウェインはそうした性格の持ち主としてユーモリストにならざるを得なく、またそうした只中で作品を書くリタラリーアーティスト（作家）としてアメリカのユーモリストにならざるを得なかったし、ある意味で彼の作品はアメリカ19世紀土着のユーモアの典型である。[7]

『トム・ソーヤー』はマーク・トウェインのユーモアが笑いを生む代表作の一つである。この小説はおもしろい。なぜか。それは19世紀のアメリカが現実的に

語られ、テーマが普遍的で、かつ夢の本だからだ。そして、語り手の人間性の見方やそこに描かれるキャラクターや社会が笑いを醸し出すユーモアがあるからである。

『トム・ソーヤー』は、作者自身が「前書き」で記すように作中の冒険はほとんどが実際に起こったことであるし、登場人物は実在の人物を基にして生き生きと描かれている。作品の「終結」では、登場人物のほとんどがまだ生きており、順調で幸せだとトウェインは書いている。トムは三人の少年を混ぜ合わせたものであり、ハックもトウェインを含む複数の少年がモデルになっている。批評家ジョン・ガーバーによれば、トムはおそらく学友のジョン・ブリッグズとウィル・ボウエンおよび若いときのトウェインに違いないということ、ポリーおばさんはトウェインの母親、メアリーは姉のパミラ、シッドは弟のヘンリー、ハックはトム・ブランケンシップ、そしてベッキーはローラ・ホーキンス等々近しい人々[8]をトウェインは実際アメリカの南西部の村で自分が生きていた時代の記憶を呼び起こし脚色した。このようにトウェインは彼らの生きざまを郷愁に耽って描いている。

物語は、批評家ジェームズ・コックスが示すように[9]、基本的にトムの世界というステージを構成する四つの要素からなる。先ず、語り手は「跳び蛙」のサイモン・ウィーラーの系譜であり、ポーカーフェースを有し、観客として幻想を用いて語る第一人称の「私」である。次にステージの中心部にいるトムというキャラクター、三つ目はセントピーターズバーグの夏という舞台、最後に聴衆としてのセントピーターズバーグの社会がある。こうした要素が人生模様を織り成し、そこにユーモアを通した笑いが描出される。

語り手「私」は、落ち着いて穏やかに、かつまた鋭い眼でアメリカ19世紀南北戦争前の南西部の社会を平然と語る。そしてその語りは詩的で、リズミカルで、また同時に人間性に溢れる。ハウルズは『トム・ソーヤー』は「その地域においてそれまでの小説で知られていた比類なき最良の生活描写だ[10]」と述べる。トウェインは語り手の客観的な眼を通して、主人公トムを中心としたセントピーターズバーグという村の人々を描く。例えば日曜学校において、トムは優美な美しい聖書を得るためというより、栄光や名声を得たいがために、機転を利かせ他の少年たちの欲しがるものと賞の引き換えカードとを交換し、それが結局聖書の節を二

千覚えたということになりヒーローになるが、そこで日曜学校の先生ウォルターズからトムは十二使徒の最初の二人は誰かと質問され、トムは答えに窮して「デイヴィッドとゴリアー」と答える。語り手は「この後の場面は幕を閉じましょう」と平然と語り、読者は笑いに誘われるしか仕方がない。同じ日曜学校において、スプローグ氏が説教をしている間、ハサミムシとプードルの事件は「試練が終わり牧師の祝祷が告げられたとき会衆全体にとって、心からの気晴らしだった」と語る。別な例を引けば、村の人たちは、当初若いロビンソン医師殺しは酔っ払いのマフ・ポッターだと決め付け、彼を町で最も血に飢えた悪漢で、縛り首にならなかったのが不思議だと執拗に言っておきながら、後になって、インジャン・ジョーが真犯人だと判明すると豹変し、彼に同情を寄せ涙ぐむ。これを語り手は、「例によって、気まぐれで道理を弁えない世間はマフ・ポッターを暖かく扱い、以前彼を虐待したのと同じようにむやみに優しくした。だが、こうした類の行為は世間の名誉となる。したがって、それに対して非難するのはよくないのだ」と大いに皮肉る。さらに、インジャン・ジョーがマクドウガルの洞窟で飢え死に、村の住人は彼のために州知事赦免の請願を涙ながらに聴衆に訴える集まりを開き著名するが、インジャン・ジョーが村人を5人も殺したことなど考えない。「それがどうだというのだ」と語り手は言う。こうした例はトウェインの風刺であり、そこからも笑いが齎される。それにしてもアメリカ人は、こうした集まりで迎合し、その場に調子を合わせるのが好きだし、ときには騙されることさえ好む。それは、村人たちがトム、ジョー・ハーパーそしてハックが死んだものと断定し、彼らの葬式を執り行っているときスプラーグ氏の説教を聞く会衆の態度が適例である。

また、語り手「私」は、さらに学習発表会の少女たちの作文について、「すべてこのわれわれの国土において、若い女性が自分たちの作文をしめくくるのに説教を含めなくてよいと感じる学校は決してない」し、「ありふれた事実は味気ない」と何気なく語る。これは皮肉であるが、今なお現代社会においてもそのまま当て嵌まるだろう。このように語り手の嘲笑いが行間に読める。語り手がトムとポリーおばさんの心理的なやりとりを語るとき、例えば、彼女はトムが「譬え百万の罪を犯したとしても、あの少年は許してあげられる」と思うところはおもしろいし、卓越した語りと言わざるを得ない。トムが、自分が言いつけられた塀の漆喰塗り

の仕事を、他の少年に表情では躊躇して見せるものの、心の内では快く譲り渡すばかりか、同時に彼には「財産が転がり込む」――このエピソードは余りにも有名だが、その際語り手は、「もしトムが本書の作者のように、偉大で聡明な哲学者であったならば、「彼は『仕事』は人が力を尽くしなければならないもので構成されており、『遊び』は人が力を尽くしなくてもよいもので構成されていることが理解できたであろう」という語りにも微笑まざるを得ない。さらに、殺人捜査のためセントルイスから来た探偵がその「糸口」をつかんだとき、語り手は「殺人の『糸口』を絞り首にはできない」と言い、そこに笑いが喚起される。とにかく、この作品における語り手の役割は大きい。なぜなら、語り手は思いのままずらりと、セントピーターズバーグの世界の真実を暴露し、読者を笑いに誘うからである。

さて、主人公のキャラクター、トムを見てみよう。物語のなかで語り手がいうように、「トムの姿勢は常に心的状態によって決まる」のだ。トムは一見明るい面だけが強調され、前面に出るが、彼の暗い面も否めない。トムは、自分がポリーおばさんを笑わせるとき、空想のギャングの親分であるとき、ベッキーから「トム、あなたってどうしてそんなに気高くなれるの」と言われるとき、あるいは教会、教室、法廷、葬式、ダグラス婦人の居間でヒーローになるときこの上なく明るい。一方、彼は、ポリーおばさんから叱られると、自分が「死の床に横たわる」ことを想像し、ベッキーと喧嘩し落ち込むと「瞬間的にでも死ねたらなあ」と思うところは究めて暗い。ベッキーに自分が思われていないと考えるトムは、「憂鬱で絶望的。自分は見捨てられ、友達のいない少年だ」と言うのだ。また、彼が夜良心の呵責に苛まれるとき彼の心は必要以上に暗い。無論、批評家パスカル・コヴィチ二世が、「トムの人生は彼の外部から来る考えに絶えず適合している。彼の自己憐憫でさえ本に由来する」[11]と述べるように、トムはこうした心の暗さを楽しんでいる感もある。しかし、基本的にトムは明暗併せ持つキャラクターである。「トムの日々は彼にとり日中は光輝と高揚の日々で夜は恐怖の時であった」と作品のなかで語られるが、それが彼の性格の反映だと言ってよいだろう。こうしたトムの性格の差異が笑いを誘う。換言すれば、トムの二面性から読者は笑いを見い出すのだ。

トムが利発な少年であることを窺わせる、塀の漆喰塗りに関する駆け引きの巧妙さはやはり笑える。この笑いは快い。日曜学校におけるスプローグ氏の説教に

飽き、トムがハサミムシとプードル犬との一件でトムが舞台の中心に位置し会衆から笑いを獲得する場合も、あるいはトムがポリーおばさんを笑わせるときのトムの笑いは尽く明るい。あるいは、トムが「痛み止めを自分が飲んだことに見せかけ、居間の床の割れ目の健康を回復させていた」ことや猫のピーターに痛め止めを無理やり飲ませ、それが大暴れして、部屋を目茶苦茶にしたのを目の当たりにし「石化した」ポリーおばさんを見て笑うトムの姿は傑作であり、明るく笑える。あるいは、トムがさまざまな舞台でヒーローになったときの笑いは一際明るい。だからこそ彼が暗くなったとき、そのギャップが余りにも大きく、読者はそんな彼であるはずがないと笑う。何しろ、トムは「教会なんかサーカスにくらべればくだらんもの」と考え、「ぼくは大きくなったらサーカスの道化師になるんだ」と胸に抱く少年である。すなわち、道化は明るいと同時に暗くもあるのだ。

「トムを発見するうえで、マーク・トウェインは実際エンターテイナーとして自分自身に関する新しい総体的見方を得ていた。なぜなら彼は一個の新しいキャラクターに遊びの原則という可能性を客観的に具体化することをやり遂げていたからである」[12]とコックスは述べる。したがって、トムは、「遊びの原則」に則したエンターテイナーであり、人目を気にして自分を誇示するのが大原則であるので、「実際何に対しても反逆することはない」[13]のである。トムには自己中心的なところがある。彼とハックが殺人現場を目撃したことについて沈黙を守ると二人で誓いを立てたにもかかわらず、それを破ってしまい、ハックの「人間への信頼」をほぼ裏切ることになる。反面彼はハックに愛情を注ぐところもあり、心暖かい。皮肉にもトムはその殺人目撃を法廷で話すことによって、ヒーローとして大人のお気に入りになり、子供たちから羨望の的になる。トムは本を読む空想家である。独立記念日にトムは、最も偉大といわれる合衆国の実際の上院議員ベントン氏に会い、「彼が25フィートの背の高さでもないし、それに近いものでもない」事実に落胆する。しかし、トムは豪気で豪放磊落だ。自分たちの架空の葬式が執り行われている最中に、トム・ソーヤーは、ジョー・ハーパーとハックと共に悠然と登場し、突然牧師が「天地こぞりて、かしこみ讃えよ－歌え一心を込めて」と声をかけ大合唱になると、「海賊トム」は周りの羨ましがる子供たちを尻目にかけ、「心のなかで、これが自分の生涯で最も誇らしい瞬間」と認めるのだった。これがトムの姿である。

夏のセントピーターズバーグは、「輝いていて、新鮮で生き生きとして…人の顔は明るく足取りは軽やか…花の香りや…青々とした緑で…『楽しい土地』、夢のようで、穏やかで、魅力的な」ところと捉えられる。確かに、自然は美しくそこに住む人々も平和のようである。しかし、現実は嵐も起こるし、デヴォートが述べるように、「その田園風景は…夢の国の一部ではなく、アメリカの一部である。それは暴力[14]も恐怖も起こり得る[15]」ところでもある。こうした村にさまざまな人々が生きている。トウェインは『マーク・トウェインのノートブックとジャーナル 第2巻』で次のように述べる。

> 人間性は、不利な立場を除けば都会では研究できない――村がその場所だ。村なら人は何から何まで分かる――都会では上辺しか知ることができなく、人の上辺は通常偽りだ。[16]

これは確かに一理ある。セントピーターズバーグはそうした村の適例だ。その意味において、「セントルイスの鼻持ちならない自惚れ屋」のアルフレッド・テンプルは胡散臭いし、同じ都市から来た探偵は上辺を衒うだけで、むしろ捜査は二の次というように読み取れる。

『トム・ソーヤー』は当初大人の風刺文として書かれたが、その方針が変えられそこに存在する辛辣な要素が削られ子供に訴えるものとなった。しかしながら、作品はそのように和らいだ形になったが、村全体の社会の探究書となっている。[17] セントピーターズバーグの社会において、子供と大人との世界を繋ぐ役割をするのがトム・ソーヤーである。[18]

ところで、トウェインは、『自伝 第Ⅰ巻』で、ハンニバルには「社会の階層があった――名門出の人々、分類されない人々そして家柄がよくない人々がいた。…その階層には超えてはならない一線が結構はっきりと引かれており、それぞれの階層の馴れ親しんだ社会生活はその階層にだけ限られていた」と述べるように、セントピーターズバーグにも同様な階層が存在する。それは教会の席次を見れば直ぐ分かる。その意味で、社会の最下層にいるハック・フィン（ダグラス夫人に引き取られてからは除く）や混血のインジャン・ジョーは教会には一切登場しない。

こうした階層から成る村の住人は大人も子供もほとんどが自己を誇示し、また

顕示する。日曜学校においてはすべての人が自分を誇示する。マフ・ポッターの弁護士がトムを証人台に着かせ、「真実は常に世間の慣習に適っている」とはわざとがましいし、郡保安官の殺人捜査に「自信があった」は虚栄心に他ならない。ドビンズ先生の教室でも児童は誇示する。トムたち三人の少年が死んだと村人たちが思い込んだとき、彼らを見た最後の人たちは誰かということが議論になり、その恩恵に浴する子供たちはある種の神聖で重要な地位が認められ、他の子供たちから羨望の的になる。それに関して誇れるものがない哀れな少年は、「ああ、自分は一度トムにやられた」という始末だ。これは、失敗に終わるものの、人間はここまで誇示するのかと人間の愚かさや弱さを浮き彫りにしている。

こうした聴衆としての村人たちは日曜学校において、スプローグ氏の興味のない話を聞くより、むしろトムが演じるハサミムシとプードル犬の演技に関心を注ぎ、顔を赤らめ笑いを抑えられないほど興奮する。正にこの描写は不敬であり、トウェインの風刺だ。宗教風刺は、トムの言う教会とサーカスとの比較において、あるいは富を得ても自由に振る舞えないといったアイロニーを抱くハックが言う「おれは教会へ行かなくちゃならねいし、汗をかきかき――おれは扱いにくい説教がでえ嫌いだ」あるいはまたハックが盗賊インジャン・ジョーの道具箱のことを 「日曜学校の本」と言った点においてもあらわれている。

「道理を弁えない世間」は付和雷同し、思い込みが激しく、浅はかである。マフ・ポッターに嫌疑をかける空気があれば、厳密に自分で調べることもせず安易に結論を下す。語り手は、そうした世間を、「証拠を転化することおよび最終的意見に達することにおいては遅くない」と語る。若いロビンソン医師殺人事件のニュースは直ぐ伝わりその日の午後の学校は休暇になってしまう。もし校長がそうしなければ世間は奇怪に思うというのだった。トムとハックが幽霊屋敷で金貨を見つけた後、隠された宝を探し求めて、セントピーターズバーグだけでなく近隣の村の少年たちでなく男たち――なかには結構まじめで空想的でない男たちも含む――によって、あらゆる「幽霊屋敷」が切り刻まれ、厚板が一枚一枚と剥がされ土台が掘り起こされるのである。語り手はこうした見苦しい社会の有り様を容赦なく暴露する。

これは作者トウェインのユーモアであり、そのユーモアが笑いを醸し出す。そしてそうした笑いが社会的作用を齎している。現代アメリカにも正にこうした例

がある。これは、アメリカの保険会社のテレビのコマーシャルが適例である。それは一枚の古い絵画の額縁の裏側に本物のアメリカの独立宣言の文書が見つかったという設定で、人々が躍起になってありとあらゆる額縁を剥がすといった場面である。人はそれを見て笑うのだが、決して架空のできごととは言えない。

にもかかわらず、『トム・ソーヤー』における笑いは明るい。なぜなら作品はコックスが述べるように「遊びの原則」で書かれているからである。明るい笑いが作品の至る所に見出せ、読者は磊落に笑える。われわれはトム・ソーヤーが遊び仲間を巧妙に塀の漆喰塗りをさせる場面に笑わせられ、利口ぶったシッドのトムに対する振る舞いを笑わずにはいられないし、お人好しポリーおばさんについても然りである。例えばトムが死んだと皆が思い込み嘆き悲しんでいるときに、シッドが「ぼくはトムが今いるところでより幸せならいいと思う」と言わなくてもよいことを平然と言うところは、正にシッドの鈍感さを物語る。学習発表会において、子供たちが悪ふざけの方法（目隠した猫を使ってドビンズ先生のかつらを剥がす）には笑わせられる。村全体の誇示の仕方もおもしろい。世間の勝てば官軍的な結果を重んじる傾向は普遍的である。それには、マフ・ポッターの例が当て嵌まり、またトムに対する世間の反応がいい例だ。トムが法廷でヒーローになると、「しかるに、もし彼が縛り首を免れたら、彼は大統領になるだろうと考えた人もいた」ということ。サッチャー判事は、自分の娘ベッキーに代わって学校で鞭を打たれたトムの「高貴で寛大で度量の大きい嘘」は歴史的なジョージ・ワシントン大統領の斧を振り下ろした一件に関する〈真実〉に値すると言う。だが、トム自身は、「永遠に合衆国の大統領になるよりむしろ一年間シュアウッドの森で無法者になった方がよい」と思うのである。

ハックもこうした笑いに一役買う。盗賊インジャン・ジョーたちの後を夜通し追って疲労困憊したハックがウェールズ人に暖かく迎えられたときのハックとウェールズ人との対話において、ハックは、そのウェールズ人と彼の息子たちが探し当てた道具箱を宝物だと思い一瞬ひどく心が動揺し、相手にそれが何だと思ったのかと理由を聞かれ窮地に陥る。そのときハックは思い切ってそれを「多分、日曜学校の本」だと答えたとき、ハックは困って微笑むこともできなかったが、ウェールズ人は身体全体で「大きな声で楽しそうに笑った」のである。そして、彼は「そうした笑いは人のポケットにある金だ。なぜならそれは、すべての

ものと同様医者の請求書を減らす」と言う。これは、『ハック・フィン』の筏師たちのエピソードを連想させ、そこでも「笑いによって彼らは元気になる」のである。トウェインはこの種のユーモアを通した笑いを強調している。

『トム・ソーヤー』は、全体を通して見れば明暗併せ持つ作品であるにもかかわらず、トウェインの明るいユーモアとしての笑いが主眼に置かれているため、語り手を通じて抵抗感が感じられない程度に人間の愚かさや弱さが描出されている。セントピーターズバークというアメリカ社会に潜在する深刻な問題を含む暗いユーモアとしての笑いは、その作品の明るい笑いによって目立たなくなっているのである。

マーク・トウェインはその自伝のなかで私の作品に存在するユーモアには「教え」があるが、他のユーモア作家の作品にはそれがないから息の長い作品として続かないと言っている。確かに、そうしたトウェインのユーモアとしての笑いには普遍的な「教え」が読み取れる。だからこそわれわれは、今もって決して古びていない、あるいは古くて新しい彼のユーモアを味わうことができるのである。

＜注＞

(1) William Dean Howells, *My Mark Twain:Reminiscence and Criticism* (New York: Harper & Brothers, 1910) 13.

(2) Mark Twain's Letters vol. 1, Edgar Marquess Branch, Michael B. Frank and Kenneth M. Sanderson eds. (University of California Press, 1988) 322.

(3) Walter Blair, *Mark Twain and Huck Finn* (Berkeley: University of California Press, 1960) 50. 原文では1870年になっているが、The Mark Twain Projectが1868年と訂正している。*Mark Twain-Howells Letters* Vol. 1. 91参照。

(4) William Dean Howells, *Mark Twain-Howells Letters* Vol. 1, Henry Nash Smith and William M. Gibson eds. (Cambridge: Belknap Press of Harvard University, 1960) 110-111.

(5) *Mark Twain:A Biographyvol.*2. Albert B. Paine ed. (New York: Harper and Row, 1912)

(6) Henry Nash Smith, *Mark Twain: The Development of a Writer* (Cambridge: Belknap

Press of Harvard University, 1962) 106. 110.

(7) Walter Blair, *Native America Humor* (San Francisco, 1960) 160.

(8) John C. Gerber, *The Adventures of Tom Sawyer* (Berkeley: University of California Press, 1980), Notes, 270-271. *Mark Twain's Autobiography II* (New York: Gabriel Wells, 1924), 92. Edward Wagenknecht, *Mark Twain: The Man and His Work* 53. 参照。

(9) James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor* (Princeton: Princeton University Press, 1966), 131.

(10) William Dean Howells, *My Mark Twain*, 125.

(11) Pascal Covici, Jr., *Mark Twain's Humor: The Image of a World* (Dallas: Southern Methodist University, 1962) 79.

(12) James M. Cox, 146.

(13) *Ibid.*, 140.

(14) 金谷良夫「トウェインと暴力」『アメリカ文学と暴力』(研究社出版、1995) 81-152.

(15) Bernard DeVoto, *Mark Twain's America* (Boston: Little, Brown, 1932) 306.

(16) *Mark Twain's Notebooks and Journals* Vol. II. Frederick Anderson, Lin Salamo and Bernard L. Stein eds. (University of California Press, 1975).

(17) Albert E. Stone Jr., *The Innocent Eye: Childhood in Mark Twain's Imagination* (New Haven: Yale University Press, 1961) 87. 90.

(18) *Ibid.*, 79.